

Title	日韓会談反対運動と日韓教会交流：一九六〇年代を中心にして
Author(s)	高, 萬松
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55 別冊, 2013.3 : 47-61
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5003
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

日韓会談反対運動と日韓教会交流

——一九六〇年代を中心にして——

高 萬 松

はじめに

一九四五年八月以降、日韓の間での最初のキリスト教会の交流が一九六〇年であった。^①日本のキリスト者学生たちの訪韓であり、教会としての取り組みとは言えなかった。そしてその五年後に日韓教会の和解の扉が開かれた。それは日韓教会交流の初穂として意味深い。

一九六〇年代の前半、日韓の両国が当事者として関わってきたのは「両国の基本関係を設定するための会談」いわゆる日韓会談である。一九六〇年代にその会談に対する賛否両論が激しく戦わされた。一九六五年六月に両国政府によって「日本国と大韓民国との基本関係に関する条約」（日韓条約と略す）が調印された。そしてその後、韓国のキリスト者が条約批准反対運動を進めた。特徴的なことは、韓国教会が教派を超えて、しかも全国的に参加したことである。本稿は、そこに注目し、日韓両国の教会がどのようにして交流を進めていたか考察したい。

1 「近くて遠い」日韓の教会

「近くて遠い国」という表現が日・韓の関係においてしばしば用いられている。地理的に、空間的に近いが、水平的関係、つまり隣人の関係にまで成熟していないことを言い表しているであろう。しかしその言葉は一九六〇年代前半の日・韓の教会関係においても通じるのではなからうか。

① 韓国の政変に対する見方

まず一九六〇年四月一九日に起きた学生運動（「四・一九学生運動（革命）」を見よう。それは三月一五日にあった大統領選挙が不正選挙であったということで学生たちが起こした反政府運動である。最初はソウルの大学生から始まったが後に全国的に広がり、その勢力に屈服して李承晩大統領が辞任する事態に至った。^②この事態を日本のキリスト教界はどう受け止めたのか。

『教団新報』（一九六〇・五・七）は「韓国昨今の情勢」と題する「論説」でそれを暴動事件として扱っている。そこでは「わが国の隣国である韓国の各地に起こった大暴動事件は、われらにも大きな衝撃を与えた。四月一八日に……各地で発生した反政府デモには約一〇万人の民衆が参加した」と述べられている。^③「解放後の半島の情勢は、せつかく自由になった国家民族としては、あまりに感心しないものであった」^④。日本のキリスト者が韓国に対して「あまり感心しない」というのが、戦後一五年の韓国に対する論者の見方であった。しかし「韓国民は日本から解放された時よりも強い解放感を感じていると言われている」^⑤という言葉は、韓国を誤解している言葉である。

韓国のキリスト教会においても一九六五年八月の『基督公報』を見ると、そこでは「八・一五の新しい覚醒」、解放二〇年の韓国教会」という題の特別記事が載っている。その中ではその解放の日を「二〇世紀の最大の喜び」と見ている。論者の歴史観には冷静さを欠いた偏った見方がある。特に「こんどの暴動が世界の同情を集めている」と述べていることから判断すると、論者もその「同情」する群れの一人であったと思われる。

前述の論説は、当時韓国に対する日本キリスト者の見方の一側面であるが、それと逆に日本に対する韓国キリスト者の見方も挙げられる。それは日本政府が、在日韓国人を北朝鮮へと送還しようとした問題に対する韓国からの反発の声に見ることができ、それには韓国キリスト者の声も含まれている。この問題によって日本に対するイメージが悪くなったであろう。日本政府が在日韓国人の北朝鮮への送還の案を一九五九年二月一三日に承認すると、韓国では与・野党共に参加した全国的規模の反対運動が展開された。

『基督公報』（一九五九・三・二）の第一面題字は「僑胞北送」「在日韓国人の北朝鮮への送還」を教会も反対する」であった。⁽⁸⁾社説の冒頭は「日本政府が在日僑胞を北へ送還することに対して、キリスト者として反対する」と明言している。⁽⁹⁾信仰の自由のない地域である北朝鮮に、在日韓国人を送ることに對して、韓国キリスト者は日本「政府」に不信感を表し、その信頼回復のために日本教会の役割を期待している。すなわち「日本教会は傍観するな。我々は、日本教会が人道と正義の側に立つて、共産圏に自由の民を送る「日本」政府に對して良心的に活動することを期待する」と記されている。⁽¹⁰⁾しかし、同年九月一二日付の『教団新報』の「北朝鮮帰還問題と韓国キリスト教連合会」と題する社説においてはそのような雰囲気を読むことができない。そこでは「朝鮮半島が南北に二分されている政治的状況の下において行われる今回の北朝鮮帰還が、できるだけ円満の中にトラブルが少なく実施されることは、日本のキリスト者たちも心から望むところである」と述べられている。⁽¹¹⁾

いずれにせよ、当時、両国の政治的要素によって、両国の教会が同じ信仰を持つ同士という親密な関係にあったとは

言えないであろう。

② 希望を持つだけの教会交流

「近くて遠い」日韓の教会関係であったが、交流しようとする希望と期待が全くなかったのではない。両国のキリスト教界の発行する新聞が相手の国と教会について言及する時には、両国教会の交流に期待を示している。

まず日本基督教団の機関紙『教団新報』に言及されている内容を見よう。前述の韓国の「四・一九学生運動」に関する論説には、「われらは隣国の情勢が一日も早く平静になり、両国の間にある壁が取り去られ、両国民が自由に交わることができる日の早からんことを望む」と締めくくられている⁽¹²⁾。交流の必要性が強調されているのは良いが、交流のできなかった根本要因については全く沈黙しているのが問題であろう。

一九六二年には両国のキリスト教会協議会(NCC)は交流を推進することを決定し、日本の教会の牧師らが訪韓した。「日本キリスト教の交流については、かねて日韓双方から呼びかけがあったが、韓国の政変などの事情で行き悩みになっていた」のが一九六〇年代の初めころであった⁽¹³⁾。それが、一九六二年になってようやく日本からの教会の指導者が訪韓できた。これと関連して韓国の『基督公報』は「日本教会代表の訪韓を契機にして」という題の社説において、それを高く評価している。一言で言えば、「両国の教会は日韓両国の平和と和解のために寄与すべき使命を持つているという主張である。この社説は両国の教会関係のために前向きな姿勢で論じているし、ここで詳しく考察しよう。

「歴史的・地理的になすすべての条件から見て、世界のどの国と民族よりも最も近くて友好的であるべき韓日両国と両民族は、過去日本の帝国主義者と軍国主義者たちの世界制覇を夢見た妄想的な侵略行為によって、歴史上、我が民族が最も大きな被害を被ってきた」と社説の冒頭で記されている⁽¹⁴⁾。「それ「民族的に被害を受けたこと」による民族的感情が妨げになって彼ら「日本人」との関係を切り、もう二〇年という長い時間が過ぎた⁽¹⁵⁾」。この言葉は、過去の歴史による

両国教会の断絶の辛さが表れている。訪問者は武藤健、白井慶吉、小崎道雄であつて、彼らは期間中、「過去に自分の民族と政治家たちが犯した様々な過ちに対して謝り、謙遜な態度で表明した」⁽¹⁷⁾。社説はそのような態度について、「未だ侵略行為を合理化し、狡猾な態度を示している」日本の政治家と較べ、論者は三人の牧師の態度によつて今までの日本に対する感情が多少柔らかなつたと告白する。そして社説の最後には、「我々両教会の信者の信仰と愛の活動が効力をもたらして、一日も早く国交を正常化させるのは、今日の教会に与えられた時代的使命」であると言つている。⁽¹⁸⁾『基督公報』を見るかぎり、日本からの訪韓者は両国教会の關係に良い前例を残したと思われる。

③ 相互関心の対象としての日韓教会

一九六一年五月一六日に当時朴正熙陸軍少将指揮下の三五〇〇人の部隊が漢江を越えてソウル中心部に進撃し、当時の民主党政権を倒した。⁽¹⁹⁾「五・一六軍事クーデター」のことである。その韓国政治状況に対して、一九六一年六月三日付の『教団新報』は「危機に立つ韓国と日本の教会」と題する論説において、「このたびの韓国のクーデターは、私たちと切つても切れない縁がある隣国のことであり、また韓国は日本以上に『キリスト教化』が進んでいる国であるだけに、他人事でなく考えさせられる」と言う。⁽²⁰⁾続いて「また私たち日本人は、ことにキリスト者は、このことを他人事でなく真剣に考えるべきである」と深い関心を表明している。その執筆者・鈴木正久は「この事態に対して韓国の教会がどうしているか」、あるいは「韓国の教会が、今や目覚めた見張番の役割を、この自国の歴史の危機の中で果しているか」と、韓国教会を心配した。⁽²¹⁾

また丁度、そのクーデターの時期にソウル滞在中であつた古屋英雄も日本に帰国後、次のような文章を残している。これは日本の神学者が、韓国の歴史に対する日本の責任を告白する最初のものではないかと思われる。「日本のクリスチャンは、かつて朝鮮で日本が行なつたことをどう思つているか」という問いに対して、その問いは、クリスチャンの

みならず、すべての日本人に対する問いとして受け止め、「韓国が現在悩んでいる苦難は、わが国の過去に犯した罪と無関係ではない」と書いている²²⁾。以上のように、当時日本の牧師、またキリスト教の新聞、雑誌は韓国教会に関心を払っていたと見てよいであろう。

2 日韓会談とキリスト者

一九六四年と六五年、この二年間は韓国で日韓会談の反対運動が激しかった時期である。日韓条約が調印された後に、韓国キリスト者は国会での批准を阻止するために批准反対運動を展開した。

(1) 日韓会談への反対

① 日韓問題は「心の問題」

一九六五年頃になると、日韓両国のキリスト者は日韓の間に横たわっている問題が「心の問題」だという共通認識を持つよう至った。問題提起は韓国キリスト者からであったと思われる。

当時韓国キリスト教界に『基督教思想』という有力な雑誌があった²³⁾。そこには幾つかの日韓会談関連記事が載っている。意味深いことは、日韓の問題の中心が「心の問題」だとしていることである。一九六五年六月号には「韓日の問題は『心の問題』』という題の「時評」欄がある。その冒頭では、「韓日間の国交正常化問題をめぐる多くの難題の底流には何よりも『不信』という根本的な心の問題が据えられている」と述べられている²⁴⁾。日本に対する「不信」というもの

は、古くは過去三六年間の植民地治下で韓国人の心が傷つけられたことによるが、「その傷は未だに癒されていない。その最中に日韓国交正常化という問題が起こってしまい韓国の世論を「対日感情を」悪化させた」と指摘する。⁽²⁵⁾

深刻なことは「心の問題」が両国のキリスト者の間で解消されていなかったことである。日韓教会交流に携わった一人の韓国人牧師は、日本のキリスト者が「同情」には強く、「悔い改め」には弱いと見ている。金観錫は『基督教思想』の一九六四年の「論説」で次のように批判の声を上げている。

我々が日本の教会の指導者たちに会う度に感じるのは、彼らが真に神の審判に対して赦しを求めておらず、国家と社会の悪に対しても不屈の姿勢を持って「対処して」いないことである。それゆえ、「彼らは」贖罪に焦点を置かず、また彼らの国がアジア民族に犯した罪悪がどれほどであったか、何を補償してその罪悪の痕跡を洗い捨てるかという考えは持っていない。一言で言うると日本のキリスト者たちは「我々に」安い同情を示しているが、神の赦しを求めるとか、また赦された者としての厳肅な姿勢を整えていない。⁽²⁶⁾

金観錫の見方が事実であるならば、日本人が韓国人に対して「同情」した理由を見つけないならならぬ。その理由は、大村勇の見解によれば、日本のキリスト者も日本の政府や軍国主義的なものに対して「被害者意識」⁽²⁷⁾を持っていたからである。また、旗田巍の指摘するように日本人の伝統的な朝鮮観にある、「優越感」⁽²⁸⁾があつたからだと考えられる。

② 日韓会談反対運動

韓国での日韓会談反対運動は一九六四と六五年にかけて激しかった。一九六四年に起きた代表的なものは以下のようなものがある。三月六日に野党連合勢力は社会、宗教、文化などの各界の代表知識人と共に対日屈辱外交反対闘争委

員会を結成し「会談の即刻中止」を要求した。⁽²⁹⁾三月二三日にはソウルの大学生たちが「民族の反逆的な韓日会談の即時中止」などのスローガンを掲げて大規模の集会を開いた。⁽³⁰⁾最も激しかったのが六月三日の反対運動である。ソウルの大学生の約一万人が参加し、以前のものとは異なつて「朴政権の打倒」というスローガンを掲げた。ついにソウル一帯に非常戒厳令が宣布されるほど事態は悪化した。そして六四年一二月の第七次日韓会談の後には、会談の結果が急速に表れた。つまり一九六五年四月に日韓条約が仮調印され、六月二日には正式に調印されたのである。その調印文の中には、決して日本の韓国問題に対する「反省」はなかつた。⁽³¹⁾それに対して、韓国ではキリスト者主導の批准反対運動が全国的に展開された。

(2) 日韓条約批准反対運動

①キリスト者主導の反対運動の推進

一九六五年六月二二日に日韓条約が東京で調印されると、韓国教会は条約批准反対に転じた。反対集会は「国家のための祈祷会」と名付けられて、当時の有力牧師・韓景職が牧会していた永楽教会で開かれた。後にそれは全国教会に広げられた。批准反対運動に対して、当時日本のキリスト者はそれが韓国教会の一部の動きと見なしているが、実際はそうではなく、韓国教会が教派を超えてその声を発信した。

②キリスト者の批准反対の論理

何よりもキリスト者の反対論理の根底にあるのは、人類の救いの歴史を支配している神信仰である。上記の「声明」に基づいて彼らの反対論理を「過去」、「現在」、「未来」という観点で分けることができる。

第一に、「過去」の歴史に対する日本の態度に対する不満である。すなわち、日本側の「懺悔」なしの条約に、韓国側が調印したことに対する反対である。彼らの主張によれば、韓国民は日本に対して「恨み」を抱いている。それは韓国民の歴史運営における過ちから由来することもあるが、日本の韓国に対する侵略政策がより大きい。最も大きなことは一九一〇年の日韓併合であり、韓国民族抹殺政策がその「恨み」を植え付けたと見なす。そして一九六五年七月一日に採択された「教職者救国委員会の声明」は、次のように「和解」の前提条件としての「悔い改め」を要求しているのである。すなわち「われわれキリスト者は個人においても国家においても、真実な和解の精神によつて共通の利益を見いだすべきであると主張する。真の和解のためには、過去に犯されたあやまちの真の悔い改めと新しい歴史を形成するための善意に基づく奉仕と協力の約束が何よりもまず行なわれねばならない」と述べているのである。

第二に、「現在」という観点でその条約が「屈辱的外交」の産物であると韓国政府を責めている。そしてその条約の内容に日本の「新植民政策」が反映されていると見ている。日韓条約の内容からキリスト者は、「韓国に対する日本の態度が強者が弱者を扱う圧力、自国の利権樹立のための布石などを重んじている『新植民政策』の露骨的表現に過ぎない」と看破しました。このまま批准が強行されると、両国民間の親善よりむしろ葛藤と敵意が激化されるのは明白です」と言っている。⁽³²⁾ 例えば当時韓国では、日本の創価学会や天理教などが入って活動を広げていた。韓国教会としてはそれを一種の文化侵入と見なす。

第三は「未来」に対する憂慮である。このまま条約が批准されると、「韓国の新しい歴史建設に破滅を招くだけでなく、韓日の両国民関の間においても葛藤と反発を招き、ついには自由民主陣営としての両国の将来に悪影響を及ぼす結果になる」と警告している。

3 日韓会談をめぐる日韓教会の相互認識

韓国キリスト者による条約批准反対運動は日韓教会交流において良い影響を及ぼした。それは「和解」をもたらす両者の共通認識であった。

① 「心の問題」としての共通認識

日韓の問題を「心の問題」と規定した韓国側の見方については前述した。大村勇もそれと共通認識に立っている。彼が日本基督教団総会議長として訪韓する直前、次のように語ったのは韓国の認識と一致している。一九六五年九月にソウルで開かれた大韓基督教長老会第五十回総会に参席する前に、彼は次のように言った。

今春二月に、大韓基督教長老会第五十回総会への招請をうけ、教団としては議長を代表として送ることを、すでにきめていた。ところが、その後、日韓条約の成立、その批准をめぐる、韓国の中に、とくにキリスト教会の間に、有力な反対運動のあることを知った。そしてその奥にあるものは、過去の日本が犯した残酷な政治に対する割り切れない思い、深い心の問題であることを知った。⁽³³⁾

現地で実際、韓国キリスト者と出会った体験を説教で取り上げた大村は、日韓関係における問題の核心を指摘する。「日朝問題のむつかしさは、その根本は、実に、この問題であります。日本人が朝鮮人を知らないという問題であります。

す。朝鮮人の心を知らないという問題です」と言う。⁽³⁴⁾

② 「悔い改め」

『基督公報』は一九六五年七月の「カルメル山」という欄において、植民地支配が韓国の近代化に貢献したという、例えば日韓会談の日本側の代表・久保田貫一郎のような主張に反論を提起し、植民地支配に対する反省の乏しさを次のように指摘する。⁽³⁵⁾「我々は昔からの怨恨を抱いてこのように言うのではない。ただ日本には反省がないということを指摘したい。「三六年間」収奪したにもかかわらず、「韓国に」貢献したと言っている人々の心に反省がない。そのことが我らの心を痛めているのである」。⁽³⁶⁾

再び大村の説教を引用したい。彼は一九七四年八月一日に、「八月一五日を思う」と題する説教で、戦争の加害者としての罪責を言い表す。

戦後になりまして、いろいろな関係で、日本が侵略したアジアの諸国、ことに韓国などで多くの人と交わる機会ができました。そういうことから、われわれ日本の教会に連なっていた日本のクリスチャンたちは、今まで日本の政府や軍国主義的なものに対して被害者意識みたいなものをもっていましたけれども、そうではない。自分の祖国が罪を犯した。この戦争において侵略したことに對して、われわれもまったく同じ加害者ではないか。教会もまた国と共に加害者である。そういう意識が、わたしの中に、本当に目覚めてきました。遅まきながら、当然のことを、今さらのごとくに痛感したわけでありませう。⁽³⁷⁾

③ 日韓教会の交流

『福音と世界』によれば、当時韓国キリスト者の反対運動は日本のキリスト者にショックを与えた⁽³⁸⁾。日本のキリスト者は韓国キリスト者の批准反対運動に問いかけられ、「初めて日本のキリスト者は、韓国のキリスト者の意識や問題を知ったし」、「日韓のキリスト者の交わりはこれが最初の契機」になった⁽³⁹⁾。

しかし日本基督教団の内部においてその訪韓の時期や意図について疑う声も聞かれる。一九六五年一月の『教団新報』には大村議長の訪韓についての「公開質問状」が載っている。その中には二点の問いがある。第一点は、「謝罪してという議長の発言は、どのような歴史的反省に立ち何を意図し、今はどのような見通しを持つものであるか」という質問である。それに対して大村は「日韓両国の不幸な関係の正常化のために、和解の務めをすることが、教会の主に従う者の当然の責任と信じて行った（マタイ五・二三―二四）」と答える。「韓国の主にある兄弟たちの前で、日本が過去において犯した政治的また人権上の罪悪について、日本の教会の悔い改めを表明し、……謝罪を表明しました。このことは日本の教会が果たすべき負い目と信じています⁽⁴⁰⁾」と大村は答えている。このように戦後最初の日韓教会交流は、韓国キリスト者の和解の呼びかけに、日本キリスト者の応答、信仰の決断によって実現したのである。

結び

一九六五年にあつた、教派を超えて全国的に展開された日韓条約批准反対運動は、日韓教会交流に大きな影響を与えたと思われる。当時の「教職者救国委員会声明」に「キリスト者として歴史形成に参与する⁽⁴¹⁾」と述べられているよう

に、彼らは、日本の過去への「悔い改め」と、両国間の「和解」がキリスト教信仰の上で遂げられることを希望し、期待した。このような韓国教会の呼びかけに、日本の教会が「信仰の決断」をもって応答し、ついに、両国教会の「和解」の扉が開かれたのである。

注

- (1) 一九六〇年九月に「戦後はじめての韓国訪問」と題する記事が、日本基督教団機関紙『教団新報』に掲載されている。『教団新報』(一九六〇・九・三)、三頁。
- (2) 文京洙『韓国現代史』岩波書店、二〇一〇年、九三―九六頁。
- (3) 『教団新報』(一九六〇・五・七)、三頁。
- (4) 同上。
- (5) 同上。
- (6) 『基督公報』(一九六五・八・一四)、一頁。『基督公報』は大韓イエス教長老会(統合派)の機関紙である。
- (7) 同上。
- (8) 『基督公報』(一九五九・三・二)、一頁。
- (9) 同上。
- (10) 『基督公報』(一九五九・三・二)、一頁。
- (11) 『教団新報』(一九五九・九・一二)、一頁。
- (12) 『教団新報』(一九六〇・五・七)、三頁。

- (13) 『教団新報』(一九六二・三・三)、三頁。
- (14) 『基督公報』(一九六二・五・一四)、一頁。
- (15) 同上。
- (16) 当時、武藤は日本基督教協議会総会議長、白井は日本基督教団総会議長、小崎は日本基督教団嶺南坂教会牧師であった。
- (17) 『基督公報』(一九六二・五・一四)、一頁。
- (18) 同上。
- (19) 文京洙、前掲書、一〇〇頁。
- (20) 『教団新報』(一九六一・六・三)、一頁。
- (21) 同上。
- (22) 古屋安雄「軍事革命下の韓国教会」、『福音と世界』(一九六一一年六月号)、新教出版社、六二頁。
- (23) 『基督教思想』は一九五七年に初めて発行された。
- (24) 時評「韓日問題は『心の問題』」、『基督教思想』(一九六五年六月号)、大韓基督教書会、八頁「한일문제는 마음의 문제」、『기독교사상』대한기독교서회。
- (25) 同上。
- (26) 金観錫「教会と韓日問題」、『基督教思想』(一九六四年六月号)、大韓基督教書会、五頁「김관석 「교회와 한일문제」、『기독교사상』대한기독교서회」。論者・金観錫は一九七〇年代になると、日韓教会交流に積極的に取り組んだ。
- (27) 大村勇「大村勇説教集・輝く明けの明星」日本基督教団阿佐ヶ谷教会、一九九二年、二八六頁。
- (28) 旗田巍「日本人の朝鮮観」勁草書房、一九七七年、九八―一〇一頁。
- (29) 李ジェオ「韓日会談と反対運動」パラブックス、二〇一一年、一八九頁「이재오 「한일회담과 반대운동」과라북스」。
- (30) 同上書、一九〇頁。
- (31) 『読売新聞』(二〇一二・五・二六)
- (32) 同上。
- (33) 『基督新報』(一九六五・九・一八)、三頁(傍点、筆者)。

- (34) 同上。
- (35) 例えば、一九五三年一〇月一五日の第三次会談の時の久保田の言葉。
- (36) 『基督公報』(一九六五・七・一七)、一頁。
- (37) 大村勇『大村勇説教集・輝く明けの明星』日本基督教団阿佐ヶ谷教会、一九九二年、二八六頁。
- (38) 「日韓友好への道―李仁夏牧師に聞く」、『福音と世界』(一九六五年一〇月号)、新教出版社、七九頁。
- (39) 同上書、八三頁。
- (40) 同上。
- (41) 『教団新報』(一九六五・九・一八)、四頁。